

インドネシア国のガジャマダ大学獣医学部において、2018年2月28日に開催されたシンポジウム **International Symposium in Veterinary Science 2018** に参加してきた。このシンポジウムは、日本とインドネシアの間の獣医学教育研究の連携をより一層高めることを目的としている。

2月28日のシンポジウムでは、日本の山口大学、鹿児島大学、鳥取大学、ならびに、インドネシアの11大学の代表者が各大学の状況を説明した。これらの発表に対し質疑応答が実施された。また出席者それぞれが、ポスター発表を行い、本報告者も **Reproductive Physiology and Management in Yamaguchi University** という内容で発表を行った。この内容については、多くのインドネシア側研究者に興味をもってもらえた。特に、インドネシアの獣医生理学会、ならびに、反芻動物学会からは、再度、インドネシアを訪問し、講演をおこなうことについて打診をされた。またポスター発表の内容に興味をもった、11大学の講師や助教からは留学の相談をされた。以上のように、非常に充実したシンポジウム参加となった。

昨年度の訪問の際に、インドネシアへの再訪を求めてくれたガジャマダ大学の副学部長（学務・学生担当）の **Agung Buiyanto** 教授と再会を果たすことが今回の訪問でできた。そして今後の国際協力についてのディスカスも実施でき、前向きにとりくむという合意が得られた。

シンポジウムの前後には、ガジャマダ大学の近郊の畜産農家やスーパーマーケット等を見学できた。畜産農家では、日本に比べると劣悪な飼育施設や、非常に低い農家の飼育管理の知識レベル、また衛生対策や飼料供給の基盤が脆弱なことなどの問題点も見つかった。一方、地元スーパーでは、日本産牛肉と比較して肉色や脂肪交雑率等が非常に悪い牛肉が、日本人の感覚からみても高価に感じる価格で販売されていることが確認された。昨年度の訪問での種雄牛飼育施設の見学でインドネシアの牛の改良が遅れていることも確認できている。そのため、インドネシアでは、様々な分野の獣医畜産学を基にした長期的な取り組みが必要であると考えられ、その第一歩としての、本シンポジウムの重要性が明らかになった。

ウシは反芻胃という発熱機を体内にもつため、ヒトよりも約10℃低い温度で暑熱ストレスを感じ始め、食欲低下、体温上昇、反芻胃内微生物の死滅、また免疫力低下が原因の感染症の増加等が起き、熱中症が原因の死亡も高頻度で起きる。

死亡を免れても、畜産物生産の効率の悪化が起きる。そのためインドネシアは、赤道直下での高い気温や湿度という重要なハンディキャップがある。その一方で、今後の著しい経済成長に伴い自給畜産物の需要の増加も考えられる。そのため益々、日本とインドネシアの国際共同が重要になると考えられた。以上のように充実した国際交流を実施できた。



写真 ガジャマダ大学の近郊の畜産農家での見学